

## ホプキンズとブリッヂェズ

山村武雄

ホプキンズが二十二歳、カトリック教に改宗する約六カ月前の作、*Nondum* 『まだ』において

And still th'abysses infinite

Surround the peak from which we gaze.

Deep calls to deep and blackest night

Giddies the soul with blinding daze

That dares to cast its searching sight

On being's dread and vacant maze.

されど 無限の 深淵は

われら たたずむ 孤峰を めぐる。

淵は淵を呼び、ぬばたまの

夜は 存在の おそろしき

うつろの 迷路に 魂が

投ぐる 探ぐりの 眼をくるめかす。

とさながら、ニューマンの『たえなる道しるべの光よ』をしのばせるような、暗黒の中にあつて、神の導きのみ手を求める、切実な叫びをあげているが、これに似通つた一種の眩暈を、ホプキンズ自身に対する場合に、われわれは感ずる。「複雑な類稀な個性が、人生体験を通じて生み出したものがホプキンズの詩である」とブランデン氏は言うが、その真摯性、その複雑性、就中その深さに空恐ろしさを感ずると共に、彼に対する軽々しい断定が極度に警戒せられる。アブリオリに線を打ち出して、これにひき寄せることは慎しまねばならぬ。この点、実証的なガードナ博士の労作に敬意を表さなければならぬ<sup>②</sup>。この過程を経た後に始めて、彼の詩の文学史上に於ける位置づけが行わるべきである。この文学史上に於ける位置づけという観点に立つて書かれた、エルジ・エリザベス・フェア女史の『ホプキンズの詩・概観と注解』がガードナよりも、またアボット編『ホプキンズよりブリッヂェズへの書簡集』(一九三五)、『ホプキンズとディクソンの往復書簡集』(一九三五)、『パトモアとの往復書簡を含むホプキンズの追加書簡集』(一九三八)及びハウス編『ホプキンズの雜記帳と論文』(一九三七)に先行して、『詩集』第二版(一九三〇)、ラヘイ『ホプキンズ伝』(一九三〇)に続いて、逸早く一九三三年に出たことが時期的に警戒を要するところである。しかし、フェアは彼女の努力と直観とによつてこの時期的不利をよく克服している。原稿のままで読んだのであろうが、書簡の類はよく眼を通して見るように見える。フェアは、英詩人中ホプキンズと類似点をもつ詩人を探して、これとの比較によつてホプキンズを浮彫りしようとする。この類似点をもつ詩人が、クラシヨールとワーズワスだと考える。クラシヨールはファンシーの点で通ずるものがあるが、ホプキンズはファンシーに留らず、イマジネーションの域に達している点でクラシヨールと相違する。ワーズワスと自然観照に於て似ているところがあるが、神観に於て、即ち汎神論的自然観と、啓示神と自然との相關關係に於てみる自然観との差異がある。フェアがこの書でブリッヂェズに言及するのは、両者を詩形創造に努力した詩人として結びつけて考えたと云つてゐる箇所だけである。裏を返して云うと、ブリッヂェズとの類似点は詩形創造に努力したこと以外には見出されない、と考えているようである。勿論そう断定し

ていたと云つていのではないし、両者には他に類似点もあると思うのであるが、両詩人には類似点より差異の方が多いことは確かである。フェアとは逆に両詩人の相違点を掘下げてみて、両者の特質を考察したいと思う。

先ずフェアの次の言葉に注意したい。

「氣質的にはホプキンズはダンの如く

最初はアポロ神につかえ、終りにまことの神の司祭<sup>④</sup>

となつた。(しかし實際は疑もなくホプキンズに於ける詩人的なものが、イエズス会士的なものに従属せしめられていたけれども)ホプキンズを *devotional poet* (信仰詩人) と名付けることは、彼の詩に於ける宗教的要素が彼の詩の全面を語つていると、誤認される恐れがある。」

なるほど『人魚の幻』と『ドイッチェラント号の難破』から「恐ろしきソネット群」に至る諸詩を比較すれば「アポロ神の司祭からまことの神の司祭」への推移は歴然としてゐる。しかしフェアはここで年代的に見た詩質の変化を言つてゐるのではない。ダンに於て見られた年代的推移が、ホプキンズの氣質に於ける順序として起る。純然とアポロ的である『人魚の幻』などの習作的作品を除外して、『ドイッチェラント号の難破』以後の作品に於ても、詩作に於いて、氣質的にアポロ神の司祭として先ず動く。次いで、まことの神の司祭としての彼が顔を出すというのである。かくの如く解釈して始めて括弧内の言葉が了解できる。それは、イエズス会士にならない、ハイゲイト・スクール時代の作品である『人魚の幻』などには当然言及していないからである。この詩作に於ける過程については後に述べるとして、先ず氣質的に見たホプキンズの初期について触れたい。

『エスコリアル』『人魚の幻』及び日記に於ける自然描写は、彼が美に対して異常に敏感であることを物語つてゐるが、ラヘイが語つてゐる逸話、「幼年時代に起り勝ちな流行病」で彼と弟のシリルが苦しんでいるとき、泣いてゐる彼を見た母が、何故泣くかと尋ねたのに対して、「シリルがあんなに醜くなつたんだもの」と答えたという話<sup>⑤</sup>が事実

とすれば、彼の醜に対する嫌悪と真率な愛情がよく窺われる。これら作品及び逸話は、早くからアポロ的面が強く出た例と言えると思うが、も一つの逸話では道德的にも敏感であつて、この敏感性が対目的に働くことを示している。即ちエルジン寮で殆んどどの生徒も液体食物を摂り過ぎるとの自説を実証せんとして一週間完全に水絶ちした。その結果、教練の時間に卒倒したほどである。教練教師は瞬間仮病を疑つたが、ホプキンズに同情をもたない生徒すら、「嘘ですつて！ あいつが嘘をつくつて？ 戯談じやない。嘘をつくよりあいつ死んじまいますよ」と言つたという。塩粒ちも同じく一週間やつた。これは十歳から十八歳までの間の出来事で、『人魚の幻』のように美的感覚を存分に發揮した詩を書くと同時的に、こういう心の動き方をしていたのである。氣質に於けるこの要素が彼を駆つて、オックスフォードを卒業しないうちに、ニューマンに走り、国教に満足できずにカトリックへ、しかも苦行ディシプリナの点においてカトリック的清教徒とも言えるイエズス会士にならせたのである。この彼の決定には、如何に懊悩を重ねているときでも、寸毫も後悔をした形跡はない。最も後悔の念と受取られそうなのは彼の死の年、一八八九年の作（三版、第七四篇）であるが、「何故に罪人の道は榮えるか？ 何故に私の努力するすべてのことは失望に終らねばならないか？ たとえあなたが私の敵であつても、おお私の友なる神よ、あなたが私を敗北せしめ給うほどにひどく私の邪魔はなさるまい。……小鳥は巢をつくる。しかし私は何もつくらない。私は時の宦官で、力んでみるが眼を覚ますような作品は生れない。おお、生命の主よ、私の根に雨を送つて下さい」と書いたソネットの冒頭は「主よ、私があるたと争うとき、あなたは実に正しい」であつた。それは摂理を肯定しての単なる愚痴の類である。

こういう心の動き方はブリッヂェズはしない。ブリッヂェズは全てを肯定する。肉体美から精神美へ、それはやがて神の愛に至る連続である。そこに断層はない。『美の遺言』で「そこで私の学友で、無二の心友なる若き詩人（ホプキンズのこと）は当時、ロヨラの家臣達の中で親衛兵の役目を勤めていたが、私の手ですすめた桃を拒んだ。彼はその甘き味覚を恐れたのである。私がひやかしたので、ためらうことをやめたが、それは私の気分をそこなうことを恐れ

てであつた。私は五十年経つた今もついで昨日のように思われるあの日に快樂を恐れる気持が分らないでもなかつたが、その快樂を恐れる気持そのものを恐れるようになっていた。しかし聖者があこがれる生命の昇華は自我の殲滅であるから、聖者が文字通りの禁慾を行うとしても何ら異とするに足りぬ<sup>⑧</sup>とブリッヂェズは言つてゐる。このことがあつたのは、ホプキンズがブリッヂェズに一八八二年六月五日送つた手紙に「園丁のデイヴィズは私が邪魔して君に彼の桃を買わせないようにしたので怒つてゐる。彼は君に安く売るつもりだつた」と書いてゐる時のことらしい。この時にはホプキンズはロウハンプトンのマンレサ・ハウスで、イエズス会の規定によつて、諸処で実地訓練をした後に、見習僧としての仕上げをしてゐる時であつた。マンレサ・ハウスはロヨラゆかりの地であるが、そこでロヨラの著した『スピリチュアル・エクササイジズ』に従つて修業をする。この著書はホプキンズが、当然のことではあるが特に重視したもので、自らその評釈書を書いてゐるが、この書は先ず最初に修道僧の俗世への執着を絶つことから始めてゐる。Indifference(世俗への無関心)を教えるのである。彼自身入会する時に、詩作全部を焼却したことは一八六八年八月七日のブリッヂェズへの書簡で述べてゐることであつて、「自我の殲滅」の一つの表れである。ホプキンズは味覚にも鋭敏であつた<sup>⑨</sup>ことは『ドイッチェラント号の難破』第八節で

How a lush-kept plush-capped sloe

Will, mouthed to flesh-burst,

Gush! — flush the man, the being with it, sour or sweet,

Brim, in a flash, full!

柔らかい、フランシスのような帽子をかぶつた、りんぼくの实が、果肉のとびでるまで、口腔で押し潰されて、サット入り出て、酸っぱかろうと甘かろうと、一瞬にして、その実が身体中に満ち溢れ、元氣つける。<sup>⑩</sup>

と信仰体験をりんぼくの实が口中で炸裂したときの味覚に譬えてゐるのにもうかがわれるが、感覺的に鋭敏であるだ

け一層彼の修道僧としての生活のきびしき、深さをしのぶのである。「自我の殲滅」で思い出されることであるが、田辺元博士は『キリスト教とマルクシズムと日本仏教』<sup>(8)</sup>なる論文に於て、「有神論は無を原理とし絶対媒介の立場に立たなければならぬのである。その場合にいわゆる啓示は、単に無媒介なる神意の自発性に成立するものでなく、相對的人間の自己をその否定的媒介として、神の絶対無がその否定に於て之を肯定しその死に於て之を復活せしめる愛の実現たることを、意味するのでなければならぬ。逆の方向からいえば、人間の自己が懺悔に於て自己の有限性とそれに執着する罪惡とを自覺し、自己を放棄し死して復活せしめらるる愛の恵を恩寵として受け容れ感謝をもつて之を確認することが、すなわち啓示たるのである」「いわゆるキリストにならぬまなぶことがキリスト者の道であるというのは、キリストと共に死して復活する無の轉換を行うこと以外に、原理的意味はない。」と言つておられる。哲學的論議をする十分な知識をもち合わせていないが、ホプキンズとブリッヂェズの対立は無の轉換を行うか、有に終始しているかの差異であることは間違いないと思う。この対立は氣質的のものであつたであらうことは幼時の兩詩人を考えれば首肯されることであるが、この氣質的のものを他に拘束されることなく二人が伸ばして行つて、後天的に益々はつきりしたものにしたのである。

二人のはつきり異つた態度を見るのに好都合なのは対共産主義（社会主義を同義語として用いる）の態度である。兩人の友情は大學時代から終生続いたが、小さな波は幾度か立つた。最初の波はホプキンズがブリッヂェズに事前に打明けることなく改宗したことでわずかながら立つた。しかしこれが鎮まるか鎮まらないときにホプキンズは例の「赤い手紙」を書いた。一八七一年八月二日である。その後二年半も、ホプキンズが『アカデミ』誌上でブリッヂェズの詩についてのアンドリュー・ラングの批評を見て、ブリッヂェズが詩を書いていることを知つて、交通再開を促す手紙を書くまで、ブリッヂェズの方からは手紙を書いていない。こんなに交通が絶えたことは前後に例がない。「赤い手紙」の内容は「しかし僕は大きな革命が近く起るのではないかと思う。口にするのも、一寸、怖い、或る意味で僕

『ドライデンのミルトン観』で「ドライデンは、私がわざと親まないようにした詩人である」と云つている<sup>⑧</sup>。またトムスンに向つて云うには、「私がドライデンとポープを読むとき、心でこう思つた。あれが詩なら、私は詩を書きたくない<sup>⑨</sup>。」と。諷刺とウィットは、美の追求とイマジネーションに生きる詩の詩質と相容れない。ミルトンに心酔するブリッヂェズはT・S・エリオットの『ドライデン論』に於ける「ドライデンの文才はミルトンの文才より広いけれども、偉大性に於て、ミルトン以上に出でないと信ずる」という言葉、就中「広い」という断定に憤激する<sup>⑩</sup>。この点の議論はここでなす暇がないが、ホプキンズは、ブリッヂェズのドライデン観に反撃を加える。一八八七年十一月六日の手紙で「君と僕は、ドライデンについて、趣味と判断の相違を露呈したことを付け加えたい。君がドライデンに感心しないのを考えると、いつも僕は、激怒を覚える。僕の文体は絶えずドライデンの方に益々近づいて行く。君はドライデンに何があるのかと反問するだろう。多くのものがある。が就中これだ。彼は英詩人中、最も男性的だ。彼の文体とリズムは、英文学中、最も強く英語の真つ裸の筋肉に力点をおいている。この賞讃はある程度の修正をほどこして、ギリシヤ語ではデモステネスに与えられる。すなわち裸のギリシヤ語の巨匠である。」このホプキンズの言葉が一時の氣紛れでないことは、翌年の八月十八日の手紙に書いていること、すなわち、詩人で批評家のオーブリー・ド・ヴィアに会う約束があつたが、所用で会えなかつた。後で他の人からド・ヴィアが、ドライデンを詩人と思つていないということを知り、彼に会えなかつたことを惜しいと思わず、はつきりそう人に語つた、というのでも分る。その手紙で彼が付け足した言葉が面白い。「だが君（ブリッヂェズ）もド・ヴィアと同意見なのだ。これこそが人間の心の愚かな墮落と、鼻もちならぬ氣紛れというものだ。」ここに、ホプキンズの氣質的に、主觀性を超越して、キャンソリシテイに立たんとする態度が端的に現れていると思うのである。ガードナ博士はホプキンズの「僕の文体は、絶えずドライデンの方に益々近づいて行く」という言葉を「謎」だとしている。しかし、ホプキンズが解釈したように、ドライデンの文体を「英語の真つ裸の筋肉に力点をおいた文体」ととれば、謎ではない。例えば『エスコリアル』人魚

の幻』の習作は勿論のこと、『ドイッチェラント号の難破』以後、本格的に詩作を始めてから最初のソネットとしての一八七七年の

God's Grandeur

The world is charged with the grandeur of God.

It will flame out, like shining from shook foil;

It gathers to a greatness, like the ooze of oil

Crushed. Why do men then now not reckon his rod?

Generations have trod, have trod, have trod;

And all is seared with trade; bleared, smeared with toil;

And wears man's smudge and shares man's smell: the soil

Is bare now, nor can foot feel, being shod.

And for all this, nature is never spent;

There lives the dearest freshness deep down things;

And though the last lights off the black West went

Oh, morning, at the brown brink eastward, springs—

Because the Holy Ghost over the bent

World broods with warm breast and with ah! bright wings.

神の莊嚴



派の詩の深さ、滋味、著しい触覚的、視覚的性質を併有することは詩人にとって大きな力となるからである。」「ウィットの詩」とはドライデンの『驚異の年』の序文に於ける定義によると、働きとしては「作者のイマジネーションが表現せんとするものの、種または観念を求めて、記憶の隅々まで探し回る働きであり、」作品としては「輪廓のはつきりしているもの、思考のめでたき結果、イマジネーションのめでたき産物である。」「ワーズワースの「詩は力強い感情のたくまざる流露である」やブリッヂェズのインスピレイション論とは異つた態度がそこにはある。一八八一年のブリッヂェズに与えたホプキンスの書簡には「私は時々、詩作が私にとって、いかに進行ののろい、骨の折れる仕事であるかに、われながら驚くことがある」と書いたが、彼の死の約一カ月前の作にして、ブリッヂェズに捧げた唯一の詩に於つ、

The fine delight that fathers thought ; the strong  
 Spur, live and lancing like the blowpipe flame,  
 Breathes once and, quenched faster than it came,  
 Leaves yet the mind a mother of immortal song.  
 Nine months she then, nay years, nine years she long  
 Within her wears, bears, cares and combs the same ;  
 The widow of an insight lost she lives, with aim  
 Now known and hand at work now never wrong.  
 Sweet fire the sire of muse, my soul needs this ;  
 I want the one rapture of an inspiration.

思想の胤をおとす 甘美な歡喜 吹管のふきつける 焰のように躍動し、 箭のように飛ぶ強い拍車は、一たび息ずいて

忽ちに消えるが 心に不滅の歌を宿す。九カ月の間、いや年だ、九年の長い間、胎内にこの歌を持ち運び、世話し、梳くしり、養護する。亡き直観の寡婦として 心は 今や明確な目的と 狂いのない手をもつて生きている。ミューズの父なる 甘美な火、私の魂はこれを必要とする。私はただひとたびの靈感の恍惚境をもとめている。

ここで、冒頭に記した「詩作に於て、氣質的にアポロ神の司祭として先ず動く。次いで、まことの神の司祭としての彼が顔を出す」という言葉を想起したい。長い間の宗教的生活、古典の教授としての負担に詩魂も疲れはてていた。詩的靈感を求める声は悲痛である。そしてあくまでアポロ神の司祭として終始し、靈感を生命としたブリッヂエズにこの悲痛な気持を訴えたいきさつはよく了解されることである。反面、彼の創作態度、彼が如何に苦吟したかをも如実に物語っている。comb は梳る、すなわち完全なる表現を求めて、いやしくも心に満たないものはどこまでも捨てて行つたことと、honeycomb にかけて、蜜にも譬うべき会心の表現は、愛情をもつて、これを育成したことを示している。フェアは「最も強烈な情緒の瞬間に於ても、ホプキンズは自意セルフ・インテント識コンシャスネスというか、軽侮的意味を含ませないのだから寧ろ自己意識セルフ・インテントといつた方がよいものを失うことは決してない。彼は進行していることを鋭敏に意識している。そしてこの意識の中には或程度の自己批判が含まれている」といつている。この態度はロマン派の詩味と共に何か「輪廓の明確」な或るクラシズムの要素をも感得させるのである。

ディクソンへの一八八一年の手紙で「私の使命は、これ以上高い標準は他のどこにも見出せないほど高い標準を私の眼前に置く<sup>⑧</sup>」という。この使命とは、イエズス会士としての使命である。この高い標準の前には必然的に精神的苦闘が展開される。

No worst, there is none. Pitched past pitch of grief,  
More pangs will, schooled at forepangs, wilder wring.

最悪というものは存在しない。悲傷の漆黒の闇より暗く、前の苦患に試煉をうけて、益々多くの苦患がいよいよ猛り狂つて 責め苛む<sup>⑨</sup>。

と底なしの苦悩につき落される。しかしこの苦悩にも眼をそむけず、瞬きもしないで直視する心は、その奥底に健康な泉をもっているのである。でなければ到底人力のなし得る業ではない。ここに到つて、ディクソンをして、テリブルと戦かした、目を覆わしめるようなペイソスが生れる。この思わず洩れた吐息がホプキンズの真骨頂である。強烈な鋭敏な感覚、異常な想像力と、気質的に働く自己滅却の精神が渾然として、深く、独創性のある、しかも万人に訴えるキャンソリシテイをもつ詩が生れた。

ブリッヂェズは生涯を美に捧げて生きた。比類のない純一性（イデオロギイ）はホプキンズもこれを愛し、われわれも嘆賞措く能わざるものである。しかしブリッヂェズの理解者トムソンの言は傾聴に値する。「もしブリッヂェズがもつと知的好奇心をもち、たとえ異端的、破壊的な思想であつても、より広い思想の領域を、少くとも興味の対象として、認めたらば、なお一層偉大な詩人になつたであらう」と。そしてこのあたりにホプキンズが *major poet* (大詩人) と称せられるに至つた因子が潜んでいるのではあるまいか。

註① Edmund Blunden, *Sketches and Reflections*, (Tokyo, Eibunsha, p. 29)

② W. H. Gardner, *Gerard Manley Hopkins (1844-1889), A Study of Poetic Idiosyncrasy in Relation to Poetic Tradition* (Martin Secker) 2 vols.

③ E. E. Phare, *The Poetry of Gerard Manley Hopkins, A Survey and Commentary* の二三頁である四月二十一日の日記の項は同じく年の記入なしにラヘイの『ホプキンス伝記』の附録に載っているからこれをみたものであらう。

④ Thomas Carew, *An Elegie upon the Death of the Deane of Pauls, Dr. John Donne*. l. 98 (*The Oxford Book of Seventeenth Century Verse* p. 401)

⑤ E. E. Phare *ibid.* p. 3.

⑥ G. F. Lahey, S. J., *Gerard Manley Hopkins* (Oxford Univ. Press) p. 3.

⑦ Lahey, *ibid.* p. 6.

⑧ Lahey, *ibid.* p. 7.

⑨ Robert Bridges, *The Testament of Beauty* IV, 433-444.

⑩ も一つホプキンスの味覚が鋭敏であつた例は一八七三年八月九日の日記である。「パーブリック氏と散歩した後、パーブリック氏はゴューゲル氏がフランミンゴの紅(或は薔薇色)は羽毛にある銅(copper)の粉末のせいだと彼に語つたことがあると話したとき、私(ホプキンス)は口の中で黄銅(brass)の味がした。」

⑪ りんぼく(別名 blackthorn) 実は青黒色で、収斂性の酸味がある。

⑫ キーンに影響をむかふことの多かつたホプキンスであるから、この箇所はキーン『憂鬱について』第三節

Though seen of none save him whose strenuous tongue  
Can burst Joy's grape against his palate fine

に食うところが多うことは確かである。

⑬ 『展覧』昭和二十二年九月号。

⑭ Bridges, *ibid.* II, 204-210.

⑮ Edward Thompson, *Robert Bridges, 1844-1930.* (Oxford Univ. Press) p. 59.

⑯ Phare, *ibid.* p. 138.

⑰ *Revelation*, xxii, 11.

⑱ Claude Colleer Abbott, *The Letters of G. M. Hopkins to R. Bridges* p. 110. (No. LXX, Oct. 26, 1883)

尚一種の人間蔑視の調子ででつる詩は(第三版)一二二二である。

⑲ Thompson, *ibid.* p. 49.

⑳ Thompson, *ibid.* p. 69.

㉑ Thompson, *ibid.* p. 70.

㉒ Phare, *ibid.* p. 19.

㉓ Wordsworth, *Poetry and Poetic Diction* (World's Classics, p. 26)

㉔ Abbott, *ibid.* p. 136. (No. LXXVII, Sept. 17, 1881)

㉕ Claude Colleer Abbott, *The Correspondence of G. M. Hopkins and R. W. Dixon*, p. 88 (No. XXI, Nov. 2, 1881)

㉖ 「ホプキンス詩集」第三版六五

⑳ 「氣質的に働く自己滅却の精神」を裏付ける記事が一八六五年三月十二日の日記にある。「アディイス（ホプキンズの親友の一人）は、僕の議論が個人的感情に色付けされて、その価値を失うと云う。この傾向は抑圧されなければならぬ。」（*A Hopkins Reader* ed. by John Pick）p. 37.

㉑ Thompson, *ibid.* p. 58.

㉒ F. R. Leavis, *New Bearings in English Poetry*, (1932) p. 159.